

●出題意図・解答例

■令和 7 年度 仁愛大学大学院 入学試験問題（一次募集）

【心理学】 I

【出題意図】

近年の臨床心理学において重要な概念・トピックに関して、十分な知識および論述する能力があるかを問う問題である。

問 1

評価の基準

- (1) 解答用紙の 3/4 以上が埋められているか。(形式的評価)
- (2) インクルーシブ教育(すべての学習者が共に学ぶという理念、障害の有無にかかわらず通常学級を基盤とする考え方、個別のニーズに応じた合理的配慮、バリアフリー化など)について正しく理解できているか。
- (3) インクルーシブ教育の利点(障害のある児童生徒、障害のない児童生徒、学校全体、社会的利点など)を具体的に論じているか。
- (4) インクルーシブ教育の問題点(教員の専門性の不足、学級規模・人的配置の不足、合理的配慮の不均質性など)を理念の肯定だけでなく、現実的な課題を批判的に捉えているか。
- (5) 今後の課題・展望の考察(教員研修・専門性向上、通常学級と特別支援教育の連携強化など)が単なる列挙ではなく、論理的な提案や展望が示されているか。
- (6) 論述内容全体について、表現の適切さ、論の整合性があるか。

参考

中島義明(編集代表)(2005)新・心理学の基礎知識 有斐閣ブックス p.449

問 2

評価の基準

- (1) 解答用紙の 3/4 以上が埋められているか。(形式的評価)
- (2) 倫理原則(自立尊重、善行・無危害、誠実・信頼性、公正など)について正しく理解できているか。
- (3) 関係性の特殊性(非対称性、依存、境界設定、専門的關係と私的關係の区別、信頼關係など)を倫理と関連づけて論じているか。
- (4) 抽象的な原則だけでなく、臨床場面で起こりうる倫理課題(守秘義務と例外、インフォ

ームド・コンセントの実際など) を具体的に示しているか。

(5) 論述内容全体について、表現の適切さ、論の整合性があるか。

【心理学】Ⅱ

【出題意図】

心理学に関連する広範な領域から、重要かつ基本的な用語の知識があるかを問う問題である。

① ゲゼル (Gesell,A)

ゲゼルは、アメリカの発達心理学者で、子どもの発達を生物学的成熟に基づく過程として捉えた点で知られる。彼は観察法を用いて運動・言語・社会性などの発達を詳細に記録し、発達の標準的な順序を示す「発達規準」を作成した。発達は内的な成熟によって段階的に進むと考え、環境の影響よりも成熟の役割を重視した点が特徴である。この理論は発達診断や教育実践に大きな影響を与え、子どもの発達理解の基礎を築いた。

参考

加藤正明 (編集代表) (1993) 新版精神医学事典 弘文堂 p.860

② 超自我

超自我とは、フロイトが提唱した人格構造の一つで、社会的規範や道徳、良心を内面化した心の働きを指す。幼少期に親や周囲から受けたしつけや価値観が基盤となり、「こうあるべきだ」という理想や禁止を個人に求める点が特徴である。超自我は本能的欲求を求めるイドと、現実的判断を行う自我を制御し、行動を道徳的に方向づける役割を担う。一方で、過度に強い超自我は罪悪感や自己否定を生みやすいとされる。超自我は人間の行動や倫理観を理解する上で重要な概念である。

参考

藤永保・仲真紀子 (監修) (2004) 心理学事典 丸善 p.467

③ ディスレクシアとハイパーレクシア

ディスレクシアは、知的発達に問題がないにもかかわらず、文字の読み書きに特異的な困難を示す学習障害である。音韻処理の弱さが背景にあるとされ、読みの遅さや誤読が特徴となる。一方、ハイパーレクシアは、年齢に比して極めて早く文字を読める一方、言語理解や

対人コミュニケーションが苦手な状態を指す。自閉スペクトラム症との関連が指摘されることも多い。両者は「読み」の能力に特徴が現れるが、その性質は対照的であり、適切な支援の方向性も異なる。

参考

国立成育医療センターHP

<https://www.ncchd.go.jp/hospital/sickness/children/007.html>

発達障害ニュースサイト「たーとるういず」HP

<https://www.turtlewiz.jp/archives/32143>

④ HTP

HTP テストは、家・木・人の三つの絵を描かせ、その内容から被験者の人格特徴や心理状態を理解しようとする投影法の一つである。家は家庭環境や対人関係、木は生命力や成長、人は自己像を象徴するとされ、描かれた形や大きさ、配置などが解釈の手がかりとなる。ただし、結果は描画技法や文化的背景の影響を受けやすく、単独で診断的判断を下すことは適切ではない。HTP は、面接など他の情報と併せて理解する補助的手法として用いられる。

参考

加藤正明（編集代表）（1993）新版精神医学事典 弘文堂 p.72

⑤ シェルドンの類型論

シェルドンの類型論は、体型と性格傾向の関連を示した分類理論である。彼は人間の体型を、筋肉質で活動的な傾向をもつ「筋肉型」、丸みを帯び社会的とされる「肥満型」、細身で内向的になりやすい「細長型」の三つに分けた。身体的特徴と気質を結びつけた点で当時は新しい視点を提供したが、個人差を単純化しすぎるという批判もある。それでも、身体と心理の関係を考える上で重要な理論として位置づけられている。

参考

下中直人（2003）心理学事典 平凡社 p.827

⑥ 心理的離乳

心理的離乳とは、子どもが成長の過程で親への精神的な依存を弱め、自分の価値観や判断に基づいて行動できるようになることを指す。思春期に見られる反抗的な態度や、親から距離を取ろうとする行動は、この自立を進めるための自然な現象である。親はそれを否定的に

捉えるのではなく、子どもが自分の世界を広げようとする発達的一段階として受け止め、過度に干渉せず見守る姿勢が求められる。心理的離乳は、主体的に生きる力を育む重要なプロセスである。

参考

下中直人（2003）心理学事典 平凡社 p.502

⑦ オープン就労

オープン就労とは、障害のある人が一般企業で他の従業員と同じ条件で働く就労形態を指す。特別な配慮や支援を受けつつも、雇用契約や業務内容は一般の労働者と同様であり、社会参加や経済的自立を促す点に特徴がある。企業側には職場環境の調整や合理的配慮の提供が求められ、本人の能力を生かすマッチングも重要となる。一方で、職場理解の不足や定着の難しさといった課題も存在する。オープン就労は、共生社会の実現に向けた重要な取り組みである。

参考

厚生労働省 発達障害専門プログラム ワークブックⅡ

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000099415.pdf>

⑧ 単純接触効果

単純接触効果とは、特定の人物や物事に繰り返し接することで、その対象への好意や親近感が高まる心理現象を指す。初めは関心が薄かった対象でも、接触回数が増えるだけで好意度が上昇する点が特徴である。広告や宣伝で同じ商品を何度も見かけると購買意欲が高まるのは、この効果の典型例である。ただし、初期段階で強い嫌悪感がある場合には効果が生じにくいとされる。単純接触効果は、日常の対人関係や社会的影響を理解する上で重要な概念である。

参考

藤永保・仲真紀子（監修）（2004）心理学事典 丸善 p.447

⑨ 側坐核

側坐核は、大脳基底核の一部に位置する神経構造で、報酬や快感の処理に深く関わる領域

である。ドーパミンが放出されることで「快い」と感じる仕組みが働き、学習や意欲、行動の選択を促す役割を担う。特に、報酬予測が当たったときに強く活動する点の特徴で、行動を強化するメカニズムの中心とされる。一方で、過剰な刺激が続くと依存行動につながることも指摘されている。側坐核は、人間の動機づけや意思決定を理解する上で重要な脳領域である。

参考

宮下保司（監修）（2022）カンデル神経科学 第2版 メディカル・サイエンス・インターナショナル p.1075

⑩ シェイピング

シェイピングとは、望ましい行動を一度に完成させるのではなく、その行動に近づく段階的な反応を強化しながら形成していく学習方法である。オペラント条件づけの技法の一つで、複雑な行動を教える際に有効とされる。例えば、動物に芸を教える場合、最初は目標行動の一部に近い反応を強化し、徐々に基準を高めていくことで最終的な行動に到達させる。この方法は人間の学習支援にも応用され、成功体験を積み重ねながら行動を育てる点に意義がある。

参考

藤永保・仲真紀子（監修）（2004）心理学事典 丸善 p.261

⑪ ウィリアムズ症候群

ウィリアムズ症候群は、第7染色体の一部欠失によって生じる先天性の発達障害で、独特の身体的特徴と認知特性を示す。心臓血管系の問題や特徴的な顔貌がみられるほか、知的発達の遅れがある一方で、音楽的感受性の高さや社交性の強さが目立つ点の特徴である。空間認知が苦手である反面、言語的な表現が比較的豊かであるなど、能力の偏りが大きいことも知られている。ウィリアムズ症候群は、遺伝的要因が行動や認知に与える影響を理解する上で重要な事例である。

参考

宮下保司（監修）（2022）カンデル神経科学 第2版 メディカル・サイエンス・インターナショナル p.1552

⑫ 信頼性と妥当性

信頼性と妥当性は、測定やテストの質を評価する際の基本的概念である。信頼性とは、測定結果がどれだけ安定して再現されるかを示す指標で、同じ条件で繰り返しても結果が大きく変わらないことが求められる。一方、妥当性は、その測定が本来測ろうとしている特性を正しく測定できているかを示す概念である。信頼性が高くても妥当性が低ければ、安定していても目的とずれた測定になってしまう。両者は心理測定や教育評価において不可欠な基準である。

参考

下中直人（2003）心理学事典 平凡社 p.433,561

【英語】

【出題意図】

英語で書かれた心理学の論文や文献を読む力を調べる問題である。基本的な知識を用いながら読解や翻訳することを求めた。

I. 患者たちの自由連想に耳を傾け、自身の自己分析も進める中で、フロイトは夢に関する報告や記憶を精査し始めた。『夢判断』（1900年）において、彼は夢がどのように精神を保護し、満足させるのかを書いている。日常生活は、立ちほだかるものや抑えきれない欲望で満ちている。夢は、本能的衝動と現実の制約とのあいだで、身体的にも心理的にも部分的な均衡をもたらすものである。

II. ワトソンは、心理学を以下のような力強い定義をもって始めた。

「行動主義者が見る心理学とは、自然科学の純粋に客観的な一分野である。その理論的目標は、行動の予測と制御ある。内観はその方法の本質的部分をなさず、また得られたデータの科学的価値は、それらがどれほど容易に意識の用語で解釈できるかに依存しない。」